

I
恐怖政治の肖像

一 未開状態の文学

あの愛すべき原住民の女が教えてくれた言葉を繰り返そうとしたとき、
「止めてください」と彼女は叫んだ、「どの語も一度しか使ってはなら
ないのです……」。

——『ボツアッコへの旅』十五

文学においては、われわれを魅惑するような出来事が起こることはあまりない。いや、さらに、魅惑されるのをわれわれは予め自らに禁じているかのようであると言わねばならない。美しくあることはほとんど警戒せねばならぬ一つの理由でしかない。完成された作品はつまらないとある者は言う。また別の者は、ある主題について、それが美しいことこそ危険なのだ。しまいには、完璧ほど凡庸に似ているものはないと。いずれも賢明であることこの上ない批評家の言葉である。「美しい詩句があつてはならぬ」と言っていたのはユゴーである。

残るは個性であり、サプライズである。ところが、文学がそうして与えてくれるかに見せるものも、すぐさま奪い返されることになる。その個性たるや、何度か繰返されるやたちまち機械的に映り、またそのサプライズは、習慣的な、まさにサプライズとは対極のものになるのである。ペギーによれば、作

家は処女作こそ真正な作品をものするが、その後は終生、おのれを真似て過ぐす。グールモン [Reyn de Gourmont, 1898] は、付け加えて、個性的な作品は失敗すれば難解になり、成功すれば平凡になるのに時間がかからないと言う。いずれにせよ落胆させられるのだ。このように、美は最初から、そして個性は最後には、われわれを幻滅させるのである。大した違いはない。つまるところ、われわれは、文学がわれわれに何を負っているのか知るところを諦めてしまったといつても過言ではない。身を護る策も攻略の方針もなく、その面前に投げ出され、途方に暮れて。

しかし希望や自負がないからなのではない。

大きな希望には、大きな失望が

ヴィクトル・ユゴーは自らを法王であると思っていたし、ラマルチーナは政治家と、バレスは将軍と思い込んでいた。ポール・ヴァレリーは、哲学者がいつも哲学に望むとは限らないものを文学に期待していた。すなわち人間に何ができるかを知ろうとしたのである。そしてジツドは、人間とは何であるか (三) を。

クロードルにとっては、俗世の残骸の上に、中世が経験したような聖なる世界を作り直せば事足りるであろう。しかしながらブルトンは、犯罪と驚異を礎とする新しい倫理が勝利することを要求する。「そのための手段が詩にはある」と彼は言う、「だが、その効能が正当に評価されていないのだ」。モークラスにとっては、作家は崩れ落ちようとする一文明全体を水面より高く保てば十分であり、また必要で